

勝負が決まった瞬間、親戚や友人などの一団が場内になだれ込む。老若男女問わずに勝ち牛の背中に乗って、手舞いで喜びを表現するのが徳之島流だ。

特集

闘牛に燃える。

鹿児島県で唯一、闘牛が行われている徳之島。
400年以上もの歴史を誇る闘牛は、
島の人にとって誇りであり、生きがいでもあります。
今回の特集では、5月に開催された全島一大会に密着。
鍛えあげられた牛同士のぶつかり合い、勢子の駆け引き、
観客や応援団の熱気、そして歓喜の手舞い。
そこには人々を熱狂させる、不思議な力がありました。
牛主のワキヤ牛（愛牛）にかける情熱をはじめ、
徳之島の闘牛の魅力をたっぷりとお伝えします。

5月2日(金)

午前7時40分、鹿児島空港発徳之島行きの飛行機に搭乗。目的は今日から4日間開催される闘牛大会の密着取材だ。

奄美群島のほぼ中央に位置する徳之島は、面積約248km²、周囲80km、人口約26,000人の島だ。徳之島町・天城町・伊仙町の3町があり、ばれいしよ(じゃがいも)やサトウキビなど農業が基幹産業。また、長寿や子宝の島としても知られている。

そして、鹿児島県で唯一闘牛が開催されている島であり、年間大小合わせて約20の大会がある。その中で最も大きな大会が、1・5・10月の年に3回開催される全島^{ぜんとういち}一大会だ。

全島一はいわば無差別級。横綱の中の横綱を決める大一番だ。島が一年で最も熱くなる大会と言っても過言ではない。わざわざ帰省して観戦する地元出身者も多いそうだ。

定刻の8時50分、天城町の徳之島空港に到着。鹿児島市内とは違う陽気が体を包み、島に来たことを実感する。早速レンタカーを借りてカメラマンと向かったのは徳之島町役場。今回の取材の案内をお願いしている、遠藤智さんに会うためだ。遠藤さんは現在役場の企画課に勤めているが、実はもう一つの顔がある。それは「闘牛研究者」

としての顔だ。

出身は宮城県気仙沼市。21年前に奥様の実家である徳之島に移住してきた。初めて闘牛を見た時、「ここは同じ日本なのか」と衝撃を受け、その魅力にはまった。以来、誰に頼まれたわけでもないのに大会の様子や出場する牛の写真を撮影して、自分のホームページで紹介している。

撮影を始めた当初は「今度対戦する相手方のスパイか」と牛主から言われたこともあったそうだが、その熱意が認められ、今ではどこの牛舎に行っ

日本で最も熱いといわれる 徳之島の闘牛。

ても「遠藤さん」と笑顔で迎えられるようになった。今回もたくさんの方に話を伺ったが、遠藤さんがいなければここまで取材をさせていただくことはできなかったかもしれない。

現在全国で闘牛が行われているのは、岩手県久慈市や新潟県の長岡市と小千谷市、島根県の隠岐の島など6県。鼻綱を付けたまま闘ったり、神事として行うためあえて勝敗をつけないなど、それぞれの地域によって闘牛の方法は違う。

その中でも、鼻綱を外して決着がつ

くまで闘い続ける徳之島の闘牛は最も熱いといわれている(最近では制限時間を設けて引き分けとする場合もある)。

「徳之島の闘牛は約400年の歴史があるといわれており、農作業で使っていた牛を意図的に闘わせたのがその起源だとされています。当時は島民唯一の娯楽であり、『なくさみ』『牛オーシ』とも呼ばれていました」

徳之島の闘牛は闘牛大会に出場することを前提に飼育されており、デビューするのは早くて3歳半〜4歳前

後。7〜9歳が円熟期といわれている。遠藤さんもデビュー前の牛を共同で所有しているのだという。

「自分の刈った草を食べている牛を見るだけで愛情を感じますよ(笑)。大会に出場すれば、勝つことも負けることもあります。当日の運に左右されることもあるでしょう。人生と重なるような部分が多いところも、闘牛の魅力なのかもしれません」

全島一大会は全島一と呼ばれる無差別級、中量級(950kg以下)、軽量級(850kg以下)、ミニ軽量級

(750kg以下)の4階級でタイトルマッチが行われるほか、デビュー戦も含めさまざまな取り組みが開催される。

また、各町に闘牛協会があり、これらの協会をまとめる徳之島闘牛連合会がある。全島一大会は各闘牛協会の持ち回りで開催されており、今回は徳之島町の主催となっている。



小さな子どもも拳を突き上げるほどの熱狂ぶり。



フェンスにかじりつき、取り組みを見守る子どもたち。お揃いのタオルで応援する。



近代的ななくさみ館の場内。
牛同士がぶつかり合うにぶい音が響きわたる。



闘牛場に入場する際は、旗を掲げ、太鼓を鳴らし、「ワイド! ワイド!」の掛け声で入場してくる。



勝ち牛を祝って紙吹雪が舞う中、大人も子どもも踊る。



昔ながらの雰囲気が漂う辺土野闘牛場。

大会初日に行われたのは「全島若手花形オールスター闘牛大会」。午後6時半から、伊仙町の「徳之島なくさみ館」で、ナイターでの開催だ。入場料は小学生以下が無料、中学生が1,000円、高校生以上が3,000円。遠藤さんと待ち合わせて、取り組み開始30分前に入場した。

現在徳之島には7カ所の闘牛場がある。約2年前に改装されたなくさみ館は全天候型のドーム闘牛場。場内はまだ新しく、徳之島で唯一の町営だ。直径約20mの円形のリングを、コンクリートでできたすり鉢状の客席が囲んでいる。遠藤さんとともに、一番前の客席、相撲でいうところの溜席（砂かぶり）に陣取る。

客席を見ると小さい子どもを連れた家族や中学生、高校生が意外と多い。若い世代まで闘牛がしっかりと浸透していることを実感する。取り組み開始直前には、約8割の客席が埋まっていた。

開会式が終わり、いよいよ取り組みが始まる。対戦する牛は1頭ずつ入場してくる。牛主や勢子（せこ）が綱を引き、露払いが塩をまき、「ワイド！ ワイド！」（徳之島でワッショイやバンザイの意味）の掛け声とともにラッパや太鼓を吹き鳴らす。お揃いの法被やタオルを巻いた応援団がそれぞれの席に陣取り、声からして応援する。

互いの牛の左側には勢子と呼ばれる人が付き、鼻綱を取って（もしくは切って）勝負が始まる。勢子は牛の角を突き合わせ、背中を叩き、声をかける。牛に寄り添い、勝利に導くための介助人とも言えようだろうか。

興奮して大きな声で鳴く牛、場内の砂に顔をこすりつける（マーキングしている）牛などいろいろな牛がおり、その個性を見極めて勝負を演出する。交代することもでき、それぞれに掛け声が違うのも面白い。

牛同士がぶつかると、ぶくて重い音が場内に響く。溜席のすぐ目の前の柵に巨体がぶつかり、砂がこちらまで飛んでくる。取材ノートは砂にまみれ、土の香りが充満する。気がつけば、観客席は満席。ライトが照らす場内は、どこか浮世離れた世界のような雰囲気（きおく）が漂っている。

結び前の「Mr.剛力」対「大進モア」の取り組みでは、すぐ目の前で勢いあまった牛に勢子がふつとばされた。リングの外に倒れこむように出ると、周囲の人間に抱きかかえられて退出していく。後から遠藤さんに聞いたところによると、足を骨折していたそうだ。人も牛も真剣勝負であることを実感。

勝敗は、相手が逃げた時点で勝ち牛が決まる。わずか数十秒で決着が決まる取り組みもあれば、20分以上闘う取り組みもある。そして勝ちが決まった

瞬間、応援席で応援していた一団が一斉にリングになだれこむ。勝ち牛に飛び乗り、「ワイド！ ワイド！」を連呼しながら、手舞いや足舞い、指笛を鳴らして歓喜する。それはまるで、抑えきれない喜びを全身で表現しているかのようだった。

5月3日(土)

取材2日目の徳之島は朝から快晴。一足早く訪れた夏のような日差しがまぶしい。今日行われるのは第10回全島中量級・ミニ軽量級優勝旗争奪戦（てんきょうたいかい）。大会会場は天城町の平土野（へんど）闘牛場だ。

昨日大会が開催されたなくさみ館に比べると、いかにも昔ながらの闘牛場といった風情を醸し出す。外周部には草も生え、どことなく牧歌的な雰囲気（きおく）が漂う。また、料金を払った観客だけが観戦できるように、周辺は巨大なブルーシートで覆われている。

取り組み前に、主催者が事故が起きないようにと清めの塩や酒を闘牛場にまく。また、昨年稽古の最中に亡くなった方の冥福を祈り、一同起立して黙祷（もくとう）を捧げる。あらためて闘牛とは危険と隣合わせであることを思い知る。

昨日見た夜のドームでの試合も面白かったが、青空の下で観戦する闘牛もまた面白い。風に乗って砂埃（さちり）が舞い、



砂埃を巻き上げながら、一步も譲らない両者。額に付いた傷からは血がにじむ。



訪れた祝い客を出迎える保岡さん。
にぎやかな前祝いは深夜まで続いた。



「必勝 大信玄号」の文字が
背中に踊る。

んと純也くんは同級生。剣道部でも一緒だった。その縁で純也くんは牛舎にもよく行くようになり、闘牛を育てたいと航くんも誘って一緒に世話をするようになったそうだ。平日は学校の授業が終わった後、休日はほぼ全ての世話を3人でしている。



左から福山龍己くん、直純也くん、前川航くん。愛牛「篠原サツシ龍己」とともに。前日の闘いでついた傷が生々しい。

じりじりした日差しが容赦なく照りつける。角によって付けられた額や体の傷に、赤い血がにじむ。この血こそ、生きていることの強烈な証だ。

また、応援団の黄色やオレンジ、黒などお揃いの法被やタオルが闘牛場によく映える。勝利とともに空に舞う紙吹雪も、とてもあざやかだった。

そんな熱い取り組みを観戦しながら、気になっていたのが勢子が発する掛け声。たまたま観戦に来ていた、福山辰巳さんにお話を伺った。ご自身も島内では名の知れた勢子であり、闘牛

勝っても負けてもやめられない。 それが闘牛の魅力。

も6頭所有している。その内の1頭は、遠藤さんとの共同所有だ。

「ハイネ！ ハイネ！」という掛け声は「はい、行け！」という言葉が短縮されたもの。勢子が最もよく使う言葉だ。ほかにも「ヒューー！」（それ、押せ！）、「ツッカモン！」（角で突け！）、「ケーラム！」（角をかけて押せ！）などがあるそうだ。

勢子になるのに資格が必要なわけではないため、正確な人数は分からないが100人ほどはいるらしい。ただ、その中でもよく依頼を受けるベテラン

えさをやり、ふんを掃除し、散歩にも連れていく牛中心の生活。一日一回のブラッシングは欠かせない。牛舎にはほかの牛もあり、担当する牛は一人で見るのが基本。「牛の世話は大変？」と質問すると、「牛が好きだから」という言葉が3人から返ってきた。

小さい頃からお父さんの背中を見てきた龍己くんは真っ直ぐな目で「お父さんはカッコいい」と話し、純也くんも福山さんを尊敬しているそうだ。また、雨が降って散歩ができない休日などは、福山さんと一緒にほかの牛舎に行って牛を見たりするのだとか。闘牛への情熱、恐るべし。

作業中、「ちゃんといえさをやったか？」と龍己くんに声をかける純也くん。そこには年齢は関係なく、仲間として気遣う姿があった。牛が好きという思いで結ばれた固い絆。そのまま大人になってもこの関係が続くのだろうと考えると、微笑ましくもあり、頼もしくもあった。

徳之島では大会に出場する前日に、親戚や友人、知人などがお祝いを持って牛主の家に集まり、出場する牛の健康を祈る「前祝い」が行われる。遠藤さんの紹介で特別に2軒のお宅におじゃまさせていただいた。

午後7時。牛舎のすぐ横にある建物に20人ほどの人数が集まり、テーブルの上に並んだ料理を楽しみながら和

の勢子は10人ほどだとか。福山さんは現在けがをしているため、今回の大会では勢子をしていないという。

小学校6年生の時から自分の闘牛を持っていたという福山さん。徳之島で暮らしているのも「闘牛がしたかったから。それだけ」とはつきりしている。勝っても負けてもやめられないのが魅力だと笑う。

取り組み後、牛主として日常の世話もしている中高生たち取材させてもらった。先ほどお話を伺った、福山さんの息子さんとその仲間たちだ。



中学校2年生の福山龍己くん^{りゅうき}と、高校2年生の直純也くん、前川航くん。ワキャ牛の名は「篠原サツシ龍己」。昨日の大会にも出場していて勝利をおさめ、見事3連勝を飾った。

龍己くんのお兄さんである和也く

気あいあいと飲んでいた。牛主は19歳の森田翔也さん。明日、ワキャ牛の「大翔小僧」がデビュー戦を迎える。

今年の春から天城農協の臨時職員として働いている森田さんは、小さい時から大の牛好き。本人はあまり覚えていないらしいが、5歳の時に勝手に牛舎から牛を連れ出して大騒ぎになったこともあるそうだ。

「明日は牛が頑張ってくれば、それでいいです。もっとも今日は、興奮して眠れないと思いますけど（笑）」

続いておじやましたのは、保岡盛満さん宅の前祝い。全島一を決める横綱戦に挑戦者として出場、しかも保岡さんの集落からは何十年ぶりというところで、大勢の人が駆けつけてとてもにぎやかだった。室内にはワキャ牛「保岡大信玄」の名が書かれたタオルやポスター、ポロシャツも飾られていた。

保岡さんにあいさつすると、すでにほろ酔い気分。宴に出席していた方が教えてくれた。「全島一決定戦に出場するだけでも非常に名誉なこと。無様な闘いはできないし、そのプレッシャーはすごいんだよ」

5月4日(日)

大会3日目は「第10回全島一・軽量級優勝旗争奪戦徳之島町大会」。いよいよ今日、横綱の中の横綱「全島一」を



にらみ合う「保岡大信玄」(左)と「伊藤兄弟 天龍王」。互いの闘志がぶつかり合う。

そしていよいよ結びの一番。場内のボルテージも自然と上がる。保岡さんが若干緊張した面持ちで、「保岡大信玄」とともに登場してきた。現チャンピオンの「伊藤兄弟 天龍王」は、1月大会で初防衛に成功。1,100kgを超える巨体の持ち主だ。

試合開始と同時に攻めるチャンピオン。その猛攻に耐え、隙を狙うチャレンジャーの保岡大信玄。観客席に歓声と悲鳴が交錯する。互いの勢子の気迫も恐いほどだ。ともに1トンを超える大型牛同士の闘いは、にらみ合い、突き合い、激しさを増していく。

そして開始から5分31秒、フェンスに押し込まれそうになった保岡大信玄が切り返し、逆にそのまま天龍王の懐に突きを見舞って勝負あり。その瞬間、場内から大きなどよめきが起こり、観客も総立ちとなる。保岡さんも両手を突き上げ、関係者と抱き合う。一斉にリングになだれ込んだ応援団は、おそらく今大会で一番多かったはずだ。

興奮がまだ冷めやらない場内では、いつまでも「ワイド！ ワイド！」が鳴り響く。これまで2日間の大会では、勝負あったと同時に席を立つ観客も少なからずいたが、この日だけは観客の多くが残り、全島一の名誉を手にした牛と牛主をいつまでもたたえていた。

雨が降っても、嵐が来ても、闘牛は負けない。

5月5日(月)

今日は大会最終日。4日間の締めとして「春の全島若手オールスター闘牛大会」が、伊仙町の伊仙闘牛場で10時から開催される。ただ非常に残念なことに、この日の天気は大雨。しかも今日の闘牛場は野外。若干憂鬱な気分になるが、カメラマンと2人で「これこそ取材の醍醐味！」と、ポジティブに捉えることにする。

今日は大会前に、出場する牛の出陣式を取材させていただくことになっていた。8時半、遠藤さんと合流して、伊仙闘牛場からほど近い牛舎に向かう。

雨と風が激しさを増す中、牛舎では世話人の富圭司さんが「翔鷹王」の両角に酒と塩をかける。続いてヤスリや



思いを込めて角を研ぐ。出陣前の大切な儀式だ。



雨に打たれ、泥をかぶりながら、それでも持てる力を振り絞り、勝利を目指す。



大翔小僧の背に乗り、拳を突き上げる森田さん。デビュー戦の勝利は決して忘れられないだろう。

決める取り組みが行われる。観客が多いことを想定して、約1時間前に会場の伊藤観光ドームに到着。すでに会場内は6、7割の客席が埋まっていた。やはり、全島一の注目度は高い。青い柱や屋根が特徴のこのドームは、外から見るより意外に中が広い。その後到着した遠藤さんに確認したら、3,000人は入るでしょうとのことだった。

試合開始前にはセレモニーが行われ、『闘牛の島』という著書で徳之島の闘牛を広く世に知らしめた作家の小林照幸さんが、徳之島で「神の牛」と呼ばれた伝説の牛、実熊牛にちなんだ実熊杯を贈呈。今大会から全島一を制した牛に贈られることが発表された。

そうこうしている内に、場内はすでに満席。試合開始前にもかかわらず、

すでに立ち見客もいる。予定より少し遅れて、1時5分にこの日の取り組みが始まった。

4試合目。頭に大翔小僧の文字が刻まれた桃色のタオルを巻いた森田さんが、「大翔小僧」を連れて堂々と入場してきた。応援席には森田さんの同級生と思われる一団が、お揃いのタオルを頭に巻いて戦況を見つめる。森田さんも身乗り出して声をからす。前日には「勢子はしなないと思います」と語っていたが、気がつけば大翔小僧の横に森田さんがいた。

その気迫が乗り移ったのか、5分14秒で見事勝利。デビュー戦を白星で飾った森田さんは牛の背に乗り、声にならない声を出し、拳を突き上げる。抑えきれない興奮と喜びが、これでもかというほどに伝わってきた。

そこにはもちろん勝ってほしいという思いもあっただろうが、同時に無事に帰ってきてほしいという思いも込められていたような気がする。1試合目に登場した翔鷹王は19分にもおよぶ死闘の末、3連勝を飾った。

ただ、場内のコンディションは最悪の一言。降り続く雨で闘牛場内はあちこちに水がたまり、どろどろ。まるで田んぼの中で対戦しているようだ。観客



すぶ濡れの遠藤智さん。なのにこの笑顔。

闘牛によって深まる絆。 それこそが島の宝。

5月6日(火)

5 試合目の「大健」対「桜蜂龍」の対戦では、開始直後に桜蜂龍の左角が折れるハプニング。フェンスに押し付けられた際、その圧力で折れたのだ。折られた角が無常にも観客席に転がり、大健の勝利となった。

午後1時過ぎ、この日最後の取り組みが終了し、4日間にわたる全島一大会も終わりを告げた。溜席で撮影していた遠藤さんは、カメラも自身も泥まみれ。だがその顔には、闘牛を堪能した充実感が浮かんでいた。

一度宿舎に戻って着替えた後、なくさみ館の資料展示室を訪れる。ここは、闘牛だけでなく民俗芸能など徳之島の伝統文化を紹介している。歴代の全島一チャンピオンの写真や、角の形や技の種類などが分かりやすく説明しており、初日に来るべきだったとカメラマンと反省する。

さらに遠藤さんに案内していただいたのは、亀津闘牛場。ここは現在使用されていないが、徳之島闘牛の聖地と呼ばれていた場所。今では雑草が生い茂り、当時の姿を思い起こすのは少し難しい。しかしそれもまた、徳之島の闘牛の一つの歴史なのだろう。

夜には遠藤さんをはじめ、同じく闘牛を愛する方や沖縄から闘牛を観戦に来られた方などと一緒にお酒を飲む。疲れた体に黒糖焼酎が染みて、その日は泥のように眠った。

取材最終日。今日は前祝いにおじゃまさせてもらった森田さんと保岡さんに、大会後の気持ちを伺った。

お2人とも対戦中のぎらつくような感じはない。勝ったことはもちろん、無事に対戦が終了したこと、周りの方々に支えられていることの感謝をあらためて感じたと話す。

「当日のことは、正直あんまり覚えていないんですよ(笑)。ちよつと気負いすぎていたと思います。自分の仕事忙しい時、友だちや親戚がトレーニングをしてくれた。それがなかったら、多分勝てなかったと思います」(森田さん)

「2月に全島一の取り組みが決まったのですが、やっぱりプレッシャーはすごかったですね…。勝ち負けだけは予想できないから。今でも勝ったことが、まだ信じられないですよ。ただ、勝って周りの方が喜んでくれたのが、一番うれしかった」(保岡さん)

お2人ともワキヤ牛を見る目が優しい。次の取り組みに向けて今は少しだけ休みますと、保岡さんが笑った。最後に遠藤さんが案内してくれた

のは、島内の多くの牛がトレーニングやリラククスも兼ねて散歩するという花徳浜。通常、大会が終わった直後の平日は少ないらしいが、遠藤さんに無理を承知でお願いして牛を連れてきていただいた。

牛主は大澤順也さん。ワキヤ牛の名は「突撃台風」。花徳浜にはよく車で連れてくるそうだ。砂浜を歩くことで足腰の鍛錬になり、コンクリートの上を歩かせるよりケガも少ない。また、海水が爪の消毒もしてくれるので、一石三鳥のこと。

普段牛の世話をしているという前田誠さんに引かれて、約1時間ほどかけてゆつくりと歩く。突撃台風も全身に砂をかけたり、波打ち際でたたずんだり、確かに気持ち良さそうだ。そして、悠々と砂浜を歩くその姿が、とても絵になる。

こうして、徳之島でのすべての取材が終わった。なぜ、徳之島でだけ闘牛が発展して現在に至っているのか。その明確な理由は、残念ながら分からない。

ただここで感じたのは、闘牛にける牛主や観客の果てしない情熱と愛

情。同時に、若い世代にもその魂のようなのものが、確実に引き継がれているということだ。

大人の勢力を見る子どもたちの目には、憧憬の念がありありと浮かんでいた。強さやたくましさに憧れるその姿は、純粹ですらあると言つていいかもしれない。

残念なこと一昔前に比べたら、闘牛をする人たちは減ってきているという。経済的な負担が増すのは事実であり、単に闘牛が好きだからという理由だけで続けていくのは難しくなった。時代とともにその流れはより顕著になつていくかもしれない。

しかしそれでも、闘牛がこの島からなくなることはないはずだ。遠藤さんも言っていたが、闘牛を飼育することは、牛主だけでは決してできない。家族や親戚、友人などたくさんの支えがあつて続けることができる。

闘牛によって深まった人間同士の絆こそが、徳之島の闘牛の歴史と文化を支えている。今回取材をさせていだいた関係者の方々の顔には、その誇りがはつきりと感じられた。

闘牛は単に牛の勝ち負けを越えた、人の営みや生き方そのもの。そこに自分と共通する何かを感じるからこそ、牛主も観客も熱狂するのではないだろうか。飛行機に乗って眼下に徳之島を見ながら、そんなことを考えた。



前田誠さんと一緒に、砂浜を悠々と歩く「突撃台風」。徳之島の日常風景だ。